

いむか

人模様

宮崎の魅力交流誌で発信



地域交流誌「みちくさ」編集長

福永栄子さん 50 (宮崎市大工3)

人生の転機を迎えたのは1996年2月、ロサンゼルス

の病院だった。持病のぜんそくがひどくなって担ぎ込まれた。呼吸を容易にするため、気管支の拡張剤が必要になったが、見習いの看護師が誤って一気に体内に挿入、急性心

不全になった。一時は意識不明になったという。

一命を取り留めたが、心臓に痛みが残り、話すことも動くこともできなくなった。半年後に無理をして帰国したが、ぜんそくが悪化し、酸素ボンベが欠かせない。さら

に1年の入院を余儀なくされ、医師からは「一生、酸素ボンベを手放せず、入院を繰り返すだろう」と告げられた。

「自然の中で療養してみないか」。2000年7月、宮崎市に住む親類に誘われ、半年程度の予定で東京から移ると、空気と水が合ったのか、2週間で体調に変化が表れた。健康を取り戻すうちに、失っていた自信も回復、そのまま住み続けることにした。

生きる気力を与えてくれた宮崎への愛着は人一倍強い。豊かな食文化や風習、ユニークな祭りも多く残る。住んでいる人も温かい。「ただ、

よそに自慢できるところが幾つもあるのにアピール下手。このまま過疎が進むと、後世に受け継ぐ人がいなくなってしまう」。魅力を発信しようと、情報誌の発行を思い立った。

地域の営みや地道に生きる人たちを紹介する情報誌「みちくさ」を創刊したのが同年10月。伝統や習わしを大切に

するお年寄りや、自分のペー

や人に触れあってほしいという願いを込めた。編集、発行だけでなく、田舎に短期滞在するツアーも企画。自らの体調が宮崎で改善したように、参加者が元気になるような催しも提供している。

紹介した人同士の出会いをきっかけに、新たなイベントが生まれたり、口コミで田舎体験の参加者の輪が広がった

りするのがやりがいという。今も薬は欠かせないが、「一度死んで、頂いた命で生きていこう」と思っている。私利私欲はない」と言う。

1年の4分の3は県内各地を飛び回り、そこで元気をもらい、その力をアピールに注ぐ。「ロサンゼルス」の看護師に感謝している。あの事故がなかったら、今の自分はいなかった。忙しい毎日だが、そう思わせる。

(甲斐也智)